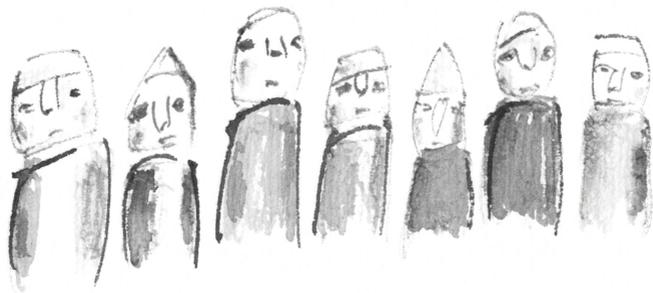


# 草画帖



第十八帖 **七** 号



秋の七草と、その他の草の号。  
表紙の絵、は吾亦紅の筆です。  
左は、七草を代表して女郎花。

秋果三笑

紫に熟れて山女あけびの笑みをせり

毬栗のまだ青くして笑ふもの

虚しさに赤き色あり石榴呵々



萩筆。  
はらはらと旅のころもこぼれつつ。



葛筆。  
真葛原を越えてゆくと、淋しさとろとろに澄む。



芒筆。  
ススキの靡く方へ行くもよし。



撫子筆。

ワレワレハ星ノ子、アマノカワラナデシコ。

## 紅天狗茸

白樺林で

紅天狗茸を狩った

ランチに

だれか

そっと混ぜ込んだ

虹が出た

虹は

安曇野をおおきく跨いで

山の

此方へ彼方へ踊った

わたしは笑いこけ

みんなは飽きはて

虹は何時間も

ひとりで野遊びをした

衣笠茸

レースを被った

美しいきのこの

卵だそうなの

いやいや

悪臭ふんぶん

神秘は人によつて

好き嫌いが激しく

女将は

卵を真二つに

………

で、

だれかの腕に

きのこの眠り姫が

入っていたはずなんだけれどね



女郎花筆。

風も来い、蝶も来い、光も雨も恋も来い。

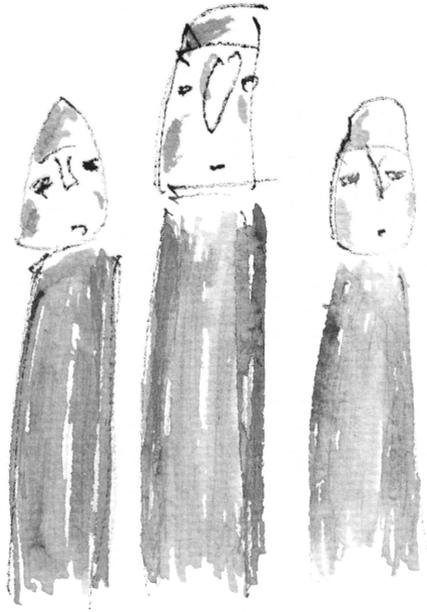


藤袴筆。  
旅の蝶、アサギマダラに会いに行く。



桔梗筆。

一夜の想いは露に凝る。朝日にきらめく珠となる。



釣鐘人參筆。

哀しみを吊り、喜びを吊り下げて人も鳴る。



芙蓉筆。開かなかった蕾で。  
秋心。あるいは、愁。

## 草話

学校で秋の七草を習った頃、萩や芒はともかく、女郎花や藤袴はもう遠い古典の花となっており、撫子、桔梗も見る機会は少なかつた。葛はあつただろうが、田舎町や田圃周りでは覚えがない。

\*

万葉集の山上憶良「秋の野の花を詠める二首」、

秋の野に 咲きたる花を 指折ゆびをりり かき数ふれば 七種の花

萩の花 尾花葛花 撫子の花 女郎花また藤袴 朝貌の花

これが秋の七草の由来とされる。朝貌の花は木槿だと言われているのが、最近では桔梗説が有力らしい。

\*

七草ではないが、中学生の頃、見知らぬ女性二人が訪ねてきて、手にした植物の名を訊かれたことがある。もちろん識るはずもない。見たことはあつても、何とも答えられない。理科はそう得意でもなかったのに、なぜ彼女たちの訪問を受けたのか。

なにやら心淋しい会話をして、ちよつとは情けない思いをした。それ以来植物を勉強した——という発展もない。それもまた情けない。

\*

そのかみの少年は、その後の歳月を重ねて、少しは草花の名も識る老人となつた。いまこそかの婦人たちと花や草を語らつてみたいと思ふばかりである。



蔓豆小豆の笑

俳句 白山鳥翁 / 絵 艸々子 / 詩 泉井小太郎

草画帖 第18号 2019年10月8日 泉井小太郎編集 六角文庫発行

〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039 Tel 0790-42-6008